

化学教育 徒然草



— 研究者はどう生きるか —

KAWAGUCHI Haruma

川口春馬

慶應義塾大学名誉教授
2006～2009 繊維学会会長



巻頭言

大学の研究室を閉じてほぼ5年になり、新しい生活のリズムにも慣れた。今、机上に、80年ぶりの再ベストセラー「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎・著)がある。それを横目に、本稿を書く。

このごろ各新聞ともスポーツのページが活況を呈している。特に、様々なスポーツの選手たちが東京オリンピックで日の丸を揚げようと奮闘している様子が詳しく報道されている。選手たちの壮烈な日々の鍛錬の様も記事になっている。目を転じて、科学技術の分野のプレイヤーたちはどうか。そんな問いかけをするなら、まずスポーツと研究の違いに目を向けなければならない。

ほとんどのスポーツは、記録や得点で順位が決まる。従って、選手は目標値を定めて、それに向けて実力を高めていく。そして本番では、他者をしのぐ結果を出せば勝者となり、表彰台で日の丸を仰ぐこともできる。一方、科学に関わる研究者は、ルールも、ゴールへの道筋も定かでないレースで、数値化しがたい偉業を成し遂げることをめざす。この世界で勝者に与えられる最高の栄誉はノーベル賞であろうか。スポーツと研究のそんな違いからか、スポーツの勝者が総じて夏の太陽のように鮮烈な輝きを放っているのに対し、ノーベル賞の受賞者の中には、秋の月のように穏やかに澄んだ耀きをみせる方々もおられる。

日本の科学技術者に関わる現状に話を絞る。経営に必要な項目として「ヒト・モノ・カネ」が挙げられる。多少意味合いに違いはあるが、研究にもこのフレーズは使える。「ヒト」は才能をもった人材。人材の一人ひとりに、研究者の覚悟を見せてくれることを期待する。「モノ」は、ここでは設備や装置を含む研究環境。昨今、施設の共同利用やオープン使用が広がっている。いずれも経費節減と研究推進の双方に有益であり、更に進められると良い。「カネ」は研究資金。この問題は深刻である。国立大学では、研究室に下りてくる研究費がゼロになる日も遠くないとの話もある。頼るべき外部資金には、助成金の中で圧倒的な割合を占める科研費等の公的資金、小規模ながら貴重な民間財団法の資金があるが、全体として助成申請の3割程度しか採択されていない。打開策として、公・民財団による助成の在り方についての検討に加え、知財権を担保しての社会からのファンディングなども考えられる。そのような状況のもと、若き研究者諸君、「君たちはどう生きるか」。

[連絡先]

241-0814 神奈川県横浜市旭区中沢3-22-8 (自宅)